

霜不知(しもしらず)



いわき市内の霜不知の栽培地域

●遠野町深山田

生産の歴史的由来

イネはイネ科イネ属の植物で、原産地により大きくアジアイネとアフリカイネに分けられます。アジアイネの起源地は、インド東部のアッサム、ミャンマー、ラオス、およびタイ北部から中国雲南省にかけての山岳地帯と考えられています。日本へは、気候などの環境に適応した型のイネが揚子江下流域から直接、あるいは朝鮮半島を経由して、縄文時代後期に北九州に伝来したと推定されています。

米は日本人の食生活に欠かせないものであるだけでなく、その副産物である稲わらやもみがらは生活用品の原材料、家畜のえさ、堆肥の材料などとして貴重なものとなっています。

遠野町深山田地区で栽培されているイネの霜不知は、昭和9～10年には浜通り南部の適品種14種の一つとされていました。深山田地区においても主にわら取り用のイネとして盛んに栽培が行われていたようですが、昭和30年頃の合成素材の普及により徐々に栽培されなくなりました。

栽培者のお宅では、少なくとも7代前から和紙作りを行っており、和紙の原料である楮こうぞの黒皮をそぎ落とす工程の中で霜不知のわらを丸めたものを道具として用いてきました。また、節米や正月飾りには必ず霜不知を用いてきました。

栽培方法の一例

4月の初めに4～5日間水に浸けます。その後、風呂の残り湯に浸け、わずかに芽がのぞいてきたら育苗箱の培土に種を蒔きます。

田植えの前には、イネ用の肥料(20kg×3袋/反)を撒いて耕します。その後、田植えの1週間くらい前に田に水を張り、3～4日前に代かきをします。あまり早く代かきをすると土が固くなるので注意します。田植えは5月10日頃に行います。

田植えのあと、7～10日くらいで除草剤を撒きます。夏の土用過ぎ頃に田の水を抜いて中干しをします。このとき、ヒビが入るまで乾かすと根が切れてしまうので注意します。イネの様子を見て、黄色くなってきたら、即効性肥料(NK肥料)を追肥します。花が咲く頃には、いもち病の消毒をします。また、霜不知は倒伏しやすいので、台風には注意し、あまり肥料はやりすぎないようにします。

穂が黄色くなってしんなりして全体が黄ばんできたら、天気の良い日の早朝に手刈りで稲刈りを行います。時期としては他のイネの作業が終了した頃となります。地面から10cmくらいの位置で刈り、刈り取った稲はシートなどに広



げて日中は天日干しをします。その後、小屋で4～5日乾燥させ、足踏みの脱穀機でもみを落とします。落としたもみは精米して食べたり、種もみにしたりします。種もみには目で見て実入の良いものを選びます。

特徴

晩生のうるち種の一つで、米の粒が小さく米質は粘りが強い、他のイネと比べて草丈が高いなどの特徴があります。また芒のぎが無いことも特徴の一つです。芒のあるイネは、たつぶち（P37参照）などで芒を落とすと、叩いて折れた芒はチクチクと肌にささり「いらっぼい」のですが、霜不知は芒が無いので仕事が楽だったと栽培者は言います。

霜不知



在来作物と伝統・食・文化

「宝船の藁細工」

栽培者のお宅では昔から霜不知を節米（正月用の米）に使ってきました。
また、こしの強い稲わらは、わら細工の材料にも適し、正月飾り、わら俵、わらじ、草履、蓑、背負子の一種であるやせ馬の背中のクッションなどに利用されました。

◆手に触れずとも凜としたわらの堅さがかがいが知れる

